

鑑定

泉鏡太郎

青空文庫

牛屋うしやの手間取てまとり、牛切りぎうきの若いもの、一婦いつぶを娶めとる、と云いふのがは
 じまり。漸やつと女房にようぼうにありついたは見みつけものであるが、其その
 婦をんな（奇醜きしう）とある。たゞ醜みにくいのさへ、奇醜きしうは弱よわつた、何なにも醜しうを奇
 がるに當あたらぬ。

本文ほんもんに謂いつて曰いはく、蓬髮ほうはつ歴齒れきして睨いび鼻深目しんもく、お互たがひに熟字じゆくじで
 だけお知ちかづき己おのの、沈魚ちんぎよ落雁らくがん閉月へいげつ羞花しうくわの裏うらを行いつて、これ
 ぢや縮ちぢれ毛つけの亂杭齒らんぐひば、鼻はなひしやげの、どんぐり目めで、面疱にきびが
 一いちめん面めん、いや、其その色いろの黒くろい事こと、ばかりで無ない。肩かたが頸くびより高たかく
 聳そびえて、俗ぞくに引ひき傾かたがりと云いふ代物しろもの、青あを膨ぶくれの腹はら大おほいなる瓜うりの
 如ごとしで、一いつしやく尺餘あまりの棚たなツ尻ちりあまつ、剩まづへ跛びつこは奈何いかん。

これが又大またたいのおめかしと來きて、當世風たうせいふうの廂ひさしがみ髮髪、白粉おしろいを
べたく塗ぬる。見みるもの、莫不辟易へきえきせざるなし。豈あにそれ辟易へきえきせざらん
と欲ほつするも得えんや。

而しかうして、而しかしてである。件くだんぎうきりの牛切あさ、朝あさから閉籠とぢこもつて、友達ともだち

づきあひも碌ろくにせぬ。

一いちにも日ばう、茫なと成なつて、田圃たんぼの川かはで水みづを呑のんで居ゐる處ところを、見懸みかけ
た村むらの若わかいものが、ドンと一ひとツ肩かたをくらはずと、挫ひしやげたやうにの
めらうとする。慌あわてて、頸首えりくびを引搥ひつつかんで、

「生いきてるかい、」

「へゝゝ。」

「確しつかり乎かしろ。」

「へゝゝ、おめでたう、へゝゝへゝ。」

「可い加減かげんにしねえな。おい、串じょうだん戯ごぢやねえ。お前まへの前まへだが

ね、悪女あくぢよの深ふかなさけ情なさけつてのを通越とほりこして居ゐるから、鬼おにに喰くはれ

やしねえかつて、皆友みなともだち達たちが案あんじて居ゐるんだ。お前まへの前まへだがね、

おい、よく辛抱しんぼうして居ゐるぢやねえか。」

「へゝゝ。」

「あれ、矢張やつぱり恐きようえつ悦えつして居ゐら、何どうかしてるんぢやねえかい

。」

「私わしも、はあ、何どうかして居ゐるでなからうかと思おもふだよ。聞きいて

くんろさ。女にようばう房ぼうがと云いふと、あの容きりやう色しきだ。まあ、へい、何なん

たら因縁いんねんで一いつしよ所しょに成なつたづら、と斷念あきらめて、目めを押おつ暝つぶつた

祝言しうげんと思へおも。」

「うむ、思ふおもよ。友だちが察さつして居ゐるよ。」

「處ところがだあ、へ々々、其その晩ばんからお前まへ、燈あかりを暗くらくすると、ふつと

ををんななからだ、月つき明あかりがさしたやうに成なつて、第一だいいちな、色いろが真まつし

白しろく成なるのに、目めが覺さめるだ。」

於き稀帷のうちに中び微燈とうの閃爍せんしやく之際するとき則すなはち殊見とくに麗人れいじんである。

「蛾眉巧笑がびかうせうくわいけふたし※ 頰が多おほ姿すがた、纖腰一握せんえういちあくきりさいじ肌理細膩。」

と一息ひといきに言いつて、ニヤ々。

「おまけにお前まへ、小屋こや一杯いっぱい、蘭麝らんじやの香かが芬ぶんとする。其その美うつくし

事ことと云いつたら、不啻まうしやうひえん毛嬙飛燕もたぐならず。」

と言いふ、牛切ぎうきりの媽か々あをたとへもあらうに、毛嬙飛燕まうしやうひえんも凄すさま

じい、僭せん上じやうの到いたりであるが、何なにも別べつに美婦びふを讚ほめるに遠慮ゑんりよは要いらぬ。其處そこで、

しんこつのもととくるをきんげざるなり
 不禁しんこつ神骨しんこつ之俱解ぎげ也。である。此これは些ちと恐おそしい。

わしわしとんとん解げせねえだ、處ところで、當人たうにんの婦をんなに尋たづねた。「

かみさんかみさんおこ
 「女房なんなは怒おこつたらう、」

なん
 「何なんちゆツてな。」

「だつてお前まへ、お前まへの前まへだが、あの顔つらをつかめえて、牛切小町うしきりこまち

なんて、お前まへ、怒おこらうちやねえか。」

「うんね、怒おこらねえ。」

「はてな。」

とばかりに、苦にが笑わらひ。

「怒らねえだ。が、何もはあ、自分では知らねえちゆうだ。私も、あれよ、念のために、燈をくわんと明るくして、恚う照らかいて見た。」

「氣障な奴だぜ。」

「然うすると、矢張り、あの、二目とは見られねえのよ。」

「其處が相場ぢやあるまいか。」

「燈を消すと又小町に成る、いや、其の美しい事と云つたら。」

とごくりと唾を呑み、

「へへ、口で言ふやうなものではねえ。以是愛之而忘

うをわする
其醜。」と言ふ。

聞者不信。誰も此は信じまい。

「や、お婿さん。」

「無事か。」

などと、若いものが其處へぞろ／＼出て來た。で、此の話は笑ひながら傳へると、馬鹿笑ひの高笑ひで、散々／＼に冷かしつける。

「狐だ、狐だ。」

「此の川で垢離を取れ。」

「南無阿彌陀佛。」

と哄と囃す。

屠者向腹を立て、赫と憤つて、

「試して見ろ。」

こゝで、口あけに、最初の若いものが、其の晩、牛切の小屋へ忍ぶ。

御亭主、戸外の月あかりに、のつそりと立つて居て、

「何うだあ、」

わか衆は額を叩いて、

「偉い、」と云つて、お叩頭をして、

「違ひなし。」

「それ、何うだあ。」

と悦喜の顔色。

於 是 村内の悪少、誰も彼も先づ一ツ、
(馬鹿な事を)

とけなしつける。

「試ためして見みろ。」

「トおいでなすつた、合が點つてんだ。」

亭主ていしゆ、月夜つきよにのそりと立たつて、

「何なにうだあ。」

「偉えらい。」と叩頭おきぎで歸かへる。苟いやしくも言げんにして信しんぜられざらんか。屠としや

者すなはち便令へんれい與宿よ焉む。幾ほとん遍どい一いち邑ふあま不ねく畜めい名いしやう娼もた矣なら。

一夜いちや珍めづしく、宵よひの内うちから亭主ていしゆが寢ねると、小屋こやの隅すみの暗くらがりに、

怪あやしき聲こゑで、

「馬鹿ばかめ、汝なんぢが不ふ便びんさに、婦をんなの形かたちを變かへて遣やつたに、何事なにごとぞ、

其その爲て體いたは。今さら去ば矣だ。」

と膠にべもなく、一いつ喝かつをしたかと思おもふと、仙人せんじんどのお覺おぼしき姿すがた、

窓まどから飛とんで雲くもの中なか、山やまへ上のぼらせたまひけり。

時ときに其その帷みちう中をんなの婦みを見れば、宛ゑんとしておでこの醜しうたい態めい、明めい白はく

に成なり畢をはんぬ。

屠としや者そ其あまの餘みりの醜にくさに、一いち夜やも側そばに我が慢まんが成ならず、田たん圃ぼをすた

く逃にげたとかや。

明治四十四年三月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「鑑定《かんでい》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鑑定

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>